



堀川ゼミ

堀川三郎 教授

環境社会学
都市社会学
まちづくり論

現場を歩き、人々との鮮烈な出会いの中で 考え、社会に繋がる学びを実践する

資格より、問題を見抜く「視角」を

資格を取るよりも、社会問題を見抜く「視角」を養い、その問題を考えるための「方法」を学ぶ場所——それが堀川ゼミだ。

もちろん資格を否定しているわけではない。しかし、堀川ゼミでは社会問題をどのようにとらえるかという「視角」を涵養することに重きを置いている。なぜなら、どんなに頭が良くても、「問題」を感じ取れずに日々をスルーしてしまうだけでは、頭の良さも宝の持ち腐れになってしまうからだ。社会問題は、そこに「問題です」といつて座っているわけではなく、「何かおかしいぞ」と感じ取る力によって見い出されるもの。問題を見抜くことのできる「視角」を涵養する必要があるというわけだ。

だから堀川ゼミでは、現場を歩く「フィールドワーク」と、本をたくさん読んで議論する「講読」の両方を行なっている。フィールドワークでは、徹

底的に現場を歩くが、それは現場にこそ問題を見つけるヒントがあるからだ。テレビや新聞で報道されていることは本当か、未だ報道されていない問題はないのかと、常に問いかけることができるようになるためには、現場に身を曝し、自らの視角を鍛えねばならない。指導する堀川教授は、32年間もの間、あるコミュニティの盛衰を調査してきた筋金入りのフィールドワーカーだ。経験に裏打ちされた彼のアドバイスは、ゼミ生には実に心強い味方である。とはいえ、ただ歩き回ればそれで良いというものではない。ゼミでは、先人の思索が蓄積されている書物を重視し、それを読み解いていく。現場と書物を常に行き来しながら活動しているのが、堀川ゼミの大きな特徴なのである。

問題解決の「方法」を学ぶ

問題を見抜く力がフィールドワークによって養われてきたら、つぎに必要なのは、問題を

考える「方法」だ。いくら視角が冴えていても、正しく考えられなければ、空回りしてしまう。

「1+1=?」のように、答えがひとつに決まっている問いというのは、世の中にある膨大な問いの中のほんの一部だ。答えも答え方も決まっているので、覚えてしまえばOKだ。しかし、大部分の問いは、解き方も答えも一つではないし、そもそも答えられるかもわからない。ゼミ生がフィールドワークの中で得ることになる問いは、こうした難しいものばかり。だから「答えを知っていること」よりも「解らないことを解るようにする方法」を知っていることの方が意味がある。

ひとつの比喩で考えてみよう。試験範囲の英文を暗記しただけの人は、範囲外の英文を自力で読み解くことはできない。なぜなら、範囲内の「正解」を知っているだけで、読む「方法」を知らないからだ。もし、習った英文法の活用と辞書の使い方を知っていれば、自力で未知の英文を読み解いていくことができる。このように考えれば、先行きの見えない現代社会で、暗記した答えだ



君よひとりで現場を歩け 現場と書物の往還から、 社会問題に挑む

堀川三郎 教授

堀川ゼミの在り方を一言で表現するなら「データをもって語ろう」です。英語で言えば「Say it with data.」となります。机上の空論ではなく、自らの足で現場を歩き、そのデータをもって社会問題を語ることです。堀川ゼミはずっと、そうしてきました。ゼミ生には、常

に現場に立って、現場から考えることを基本として求め続けてきたといえるでしょう。本ゼミが長年にわたって取り組んできた社会問題は、衰退した都市の再開発です。具体的には、まちづくり、都市問題、景観保存問題、公害・環境問題をテーマとし、住民が自らの社会づくりに参画できるような道筋をつけ、公害・環境問題では、その被害が矮小化して被害者が泣き寝入りしなくて済むよう、これらの課題解決のための調査・研究をしています。「現場を歩き、足で考える」をゼミの基本理念にしているのは、他人の意見の受け売りやテレビで見聞きしたことをなぞるだけでなく、自らの足と頭、眼を使って考えに考え抜き、自分の言葉を紡ぎだすことこそ、堀川ゼミの目指していることだからです。「厳しいから大変」ではなく「厳しいから楽しい」と思える学生を歓迎しています。それは、「よく学び、よく遊べ」を体現できるメリハリを持った学生です。自分の未来に向かって、厳しく鍛えることを厭わず、その先にとびきりの楽しさが待っていると信じ、頑張る人にこそ、是非、本学社会学科に来て学んで欲しいと願っています。

徹底したフィールドワーク

現場を歩くフィールドワークは、「社会調査実習」という授業で行われる。何らかの問題を抱えた地域社会を選び、一週間の合宿を組んで徹底的に現場を調べて論文をまとめる。朝から晩まで歩き回り、町を皮膚感覚で理解していく。体を張って地域問題に取り組む人々へのインタビューは、徹夜になることだってある。こうした鮮烈な地域人との出会いはゼミ生の内面を耕し、豊かなものへと鍛え上げてくれる。論文集がまとまる頃には、学生の顔つきが、社会問題と知的に格闘した結果、自信を持って発言する頼もしいものへ

PROFESSOR'S MESSAGE

に現場に立って、現場から考えることを基本として求め続けてきたといえるでしょう。本ゼミが長年にわたって取り組んできた社会問題は、衰退した都市の再開発です。具体的には、まちづくり、都市問題、景観保存問題、公害・環境問題をテーマとし、住民が自らの社会づくりに参画できるような道筋をつけ、公害・環境問題では、その被害が矮小化して被害者が泣き寝入りしなくて済むよう、これらの課題解決のための調査・研究をしています。「現場を歩き、足で考える」をゼミの基本理念にしているのは、他人の意見の受け売りやテレビで見聞きしたことをなぞるだけでなく、自らの足と頭、眼を使って考えに考え抜き、自分の言葉を紡ぎだすことこそ、堀川ゼミの目指していることだからです。「厳しいから大変」ではなく「厳しいから楽しい」と思える学生を歓迎しています。それは、「よく学び、よく遊べ」を体現できるメリハリを持った学生です。自分の未来に向かって、厳しく鍛えることを厭わず、その先にとびきりの楽しさが待っていると信じ、頑張る人にこそ、是非、本学社会学科に来て学んで欲しいと願っています。



ゼミで最初に精読した 『社会学に何ができるのか』 から得た考え抜く姿勢

2年 真鍋佳那子さん

このゼミでは「社会学」という道具を使って、考える方法を訓練できます。当たり前と思っていたことを「本当にそうなのか」と積極的に問いかけることで視野が広がるのです。私は鎌倉市の歴史的風土保全に関する住民運動について研究していますが、景観保全の集會に参加した際、年配の方が多く、若い世代が少ないという状況に危機感が生じました。将来の世に景観を残そうと動いているにも関わらず当事者である若者の無関心は問題です。ゼミに入ってから、自分から学びに行く大切さを知って驚くほどに達成感があります。私たちのゼミでこだわっているパーベキューも楽しく、充実しています。将来にわたってゼミで得た、モノを考え抜く姿勢を生かしていきたいと思えます。

〔主な卒業論文〕

- まちづくりに関する官民パートナーシップ
- 「伝統の創造」概念の再検討
- ネットワーキング2.0
- 「博物館化」された都市
- なぜ電車内にBGMは流れないのか



Photo: Satoru Horiuchi, 2015

社会と繋がっている学び

堀川ゼミが長年にわたって取り組んでいる社会問題に、衰退した都市の再開発問題がある。

日本では、今あるものを壊してまったく新しく建て替えてしまうという「スクラップ&ビルド」方式が行われてきた。その結果、昔ながらの町並みは消滅し、どこにでもあるような風景が広がっている。町並み保存運動は、そんな再開発政策に「ノー！」という運動だ。何を保存するのか？ 開発できなくてよいのか？ 町は再活性化できるのか？ 堀川ゼミはこうした難問を地道に調査研究してきた。特効薬があるわけではないし、住民も行政も学生の提言を素直に聞いてくれるわけでもない。しかし、住民運動と行政に対立が起こるのはなぜか？ どこでボタンの掛け違いが起きたのか？——堀川ゼミの調査は、こうした大切な基礎部分を明らかにしてきた。その結果、今ではかつての住民運動の参加者と、市職員の双方が、堀川ゼミに問い合わせをしてくるまでになったという。「〇〇の資料はありますか？」「△△という政策についてご意見をうかがいたい」と。住民と行政の双方から頼りにされているという事実は、堀川ゼミの社会的貢献を示す好例だ。堀川ゼミは行政批判ばかりしているわけでも、そのお先棒を担っているわけでもない。地域社会の全体を視野に入れ、ゼミとして18年にわたって地道に調査を続けてきたデータの集積とその重みで勝負しようという姿勢が、地域社会に認められているからこそ信頼関係なのだ。堀川ゼミでの学びは、社会とまっすぐに繋がっている。